様式第5号（第5条関係）

令和６年１１月１日

磐田市議会議長　鈴木　喜文　様

会派名　市民と創る磐田
代表者　　鈴木　弥栄子

# 会派視察研修等報告書

会派視察研修等の結果について、磐田市議会政務活動費の交付に関する規則第5条の規定により、下記のとおり報告します。

記

| | |
|---|---|
| 期　　間 | 令和６年１０月２３日（水）～令和６年１０月２５日（金）２日間 |
| 視察先<br>研修会　日　程 | (1)　１０月２３日（水）　時間１０：００～１１：３０<br>静岡県庁（交通基盤部都市局 地域交通課）<br>(2)　１０月２４日（木）　時間１０：００～１１：３０<br>埼玉県　志木小学校・いろは遊学館・いろは遊学図書館<br>(3)　１０月２５日（金）　時間１０：００～１２：００<br>東京都　八王子市立高尾山学園<br>１０月２５日（金）　時間１４：００～１５：３０<br>東京都　八王子市役所（教育委員会） |
| 参　加　議　員 | 山下千賀子　　鈴木弥栄子 |
| 調　査　事　項 | １静岡県庁　交通基盤部都市局　地域交通課<br>「交通空白地解消の取組について」<br>ライドシェアを含む地域公共交通の現状と課題、今後の取組の方向性について<br>２埼玉県志木市<br>志木小学校・いろは遊学館・いろは遊学図書館<br>「地域コミュニティに支えられた学社融合施設について」<br>平成15年に老朽化対策と耐震化を目的に建設された、学社融合施設における地域コミュニティと学校の施設利用、人的資源の連携と運営上の課題等について<br>３東京都八王子市<br>市立高尾山学園・教育委員会<br>・「八王子市教育委員会指針と不登校総合対策について」<br>教育委員会指針『みんなが集う学校の未来』の概要及び小中一貫教育と地域学校協働活動の取組について<br>・不登校総合対策の考え方と不登校特例校「八王子市立高尾山学園」での実践状況について |
| 調　査　内　容<br>考　　察 | 別紙のとおり |

（注）　視察研修の調査内容及び考察は、視察先ごとに詳細に記入する。
調査事項等に係る資料等を添付する。

会派視察研修等報告書

【調査内容と考察】

1 静岡県庁　「交通空白地解消の取組について」

① 交通空白地（バス・タクシーによる移動手段の維持確保が困難な地域、又は今後困難となることが予想される地域等）の現状と解消策の考え方、解消策におけるライドシェアの位置付けについて

② これまでに実施されてきた公共ライドシェアの試行導入状況と、その成果と課題

③ ライドシェア実用化に向けた取組の考え方と事例

④ 様々な交通空白地解消策の具体例と今後の地域交通政策の方向性

【考　　察】

県では、交通空白地を解消するためには、公共ライドシェア（自家用有償旅客運送）が有効な対策の一つとして考えていることから、これを県内全域に展開していく予定である。

公共ライドシェアとは、市町村などが自家用車を活用して提供する有償の旅客運送で、県内では１３市町で取組を推進中。

令和6年4月までに制度の規制緩和が行われ、運賃を設定することなどができるようになり、これまで以上に活用しやすくなった。

全国では、市町村やNPO法人、農協、商工会、観光協会など多様な主体により公共ライドシェアの導入が進められている。

今年度、県では、地域の実情に応じた導入を図るため、全国の先行事例の情報共有や、導入に向けた助言を行うアドバイザーを派遣するなど市町支援に取り組んでいる。

今までのように近所の助け合いだけでは、持続可能な暮らしの足にはならない。

そうかと言って、ライドシェアで全てカバーできるかと言えば、それも難しい。

しかし、バス停や駅までを繋ぐ役割としては機能を果たすことができると考える。

地域住民が困って提案した事例の方が、上手く運営できているとの報告もあった。

自分たちの移動手段の確保は、必要になってから考えるのでは遅い。

中学生以上全住民アンケートでは、若者からの回答にも「移動手段の確保」が優先順位の上位にあった。

地域の中で、あらゆる世代の住民が一緒に「自分たちの地域の交通手段」について考え、話し合う場を持ち、未来を創っていくことが必要だと考える。

2 埼玉県志木市立志木小学校・いろは遊学館・いろは遊学図書館

「地域コミュニティに支えられた学社融合施設について」

① 学校・図書館・公民館の複合施設整備に至った背景と考え方

② 建設までの市民・議会等からの意見および、民意反映のプロセス

③ 児童と地域の人々の交流、学校と地域との連携の状況、およびセキュリティの問題など、運営の実態

④ 建設コストや運営コストなど、複合化による経済的な効果

【考　　察】

隣接する小学校、公民館、図書館が、老朽化と耐震性という、共通の課題を持っていたことをきっかけに、また当時の教育長の「自分は近所の大人に育てられた」という思い出から「これからの学校教育は、地域の協力のもとに。学校の中に町角を持ってこよう」となり、「合築ではなく複合施設を創る」というビジョンのもとに進められた。

「地域に開かれた学校」なので、児童が授業をしている隣でサークル活動が行われたり、一般利用者と同じ時間に公共図書館を利用したり、先生や友達以外に、図書館・遊学館の利用者、職員など、多くの大人と接する機会がある。

しかし、着工時期に「池田小学校事件」が起こり、不特定多数の人が学校に入れるこの施設に対して、建設反対の動きが高まることもあった。

このため、ハード対策として、防犯カメラの設置、職員・教職員はPHSと警笛の常時携帯、課業時間帯は警備員を常駐、教室は廊下側に壁のないオープンシステム化などを取り入れている。
ソフト面では、大人は児童を見守る「目」としての役割を担い、先生の目が届かない死角を利用者がカバーしてくれているとのことであった。
私たち視察者の案内を6年生の児童がしてくれたことにも驚かされた。大人との接し方、言葉遣いなどが、自然と身についている様子だった。
公民館のイベント「ふれあい祭り」への参加や、図書館での児童による図書の貸し出しなど、公民館と図書館と学校が連携することで、小学校だけではできないような経験を子どもたちにさせることが可能になっている。
全国的に子どもが減少傾向なのに対し、この小学校では毎年30人増えており、来年度は教室が不足するとのこと。文科省で紹介されたり、不動産会社の宣伝もあったりして「志木小学校へ行ける」ということが保護者世代には魅力となっているそうである。
しかし、このような取組をしているのは市内で、この小学校のみであった。
磐田市でも、人口減少及び学校施設と交流センターなど公共施設の老朽化は課題であり、どのように再編成するのが良いか、志木小学校の事例なども参考に、多様な視点を取り入れていくことが必要だと考える。

3 東京都八王子市　市立高尾山学園（不登校特例校）・教育委員会
① 高尾山学園の教育理念、登校への支援策、学校の体制、運営上の課題など
② 教育委員会指針の骨子と特徴、策定までの議論プロセス
③ 不登校と未然に防ぐための学校内の支援、相談体制
④ 学校と地域との連携・共創の現状と効果等

【考　　察】
八王子市教育委員会指針では、2022年に2040年のめざす姿として「地域の拠点となる学校施設の共創」を掲げている。それを実現するために「小中一貫教育を基本とした学校教育の場づくり」と「学校施設を活用した協働活動の場づくり」の二つに取り組み、学校と地域との連携が重要視されている。
不登校総合対策としては、「みんなが八王子の宝だよ」として「つながるプラン」を策定している。このプランでは今後５ヶ年をかけて専門的な指導・相談を受けていない不登校児童生徒を「０」にすること、中学校卒業後に希望進路を持つ生徒の進路未決定者を「０」にすることを達成目標として取り組んでいる。本市においても同様に、誰ひとり取り残さない支援を目標として取り組むことが必要と考える。
高尾山学園は、学びの多様化を体感できる不登校特例校で、２割の時数軽減と柔軟な教育課程で、対面を重視した指導を行っている。また、教育と福祉と医療が連携して児童生徒を支援し、対応が難しい子どもと保護者に寄り添う支援をしている。
登校支援策として、分かりやすく楽しい授業を目指し、授業の出席率を先生へフィードバックして授業改善を求めている。
また、教科により支援員が数名配置され、児童生徒の学びの支援を充実させている。
授業に出るのは自己責任で、プレイルームや図書室、相談室にいることもできる。
何処にいても子どもたちの思いや行動を大人が尊重し、見守ることが実践されていて、子どもは元気になれると感じた。
登校を安定させるには、わかった・できた・褒められた・だれかと協力してできたなどの自己肯定感の醸成を実感できる仕組みづくりが必要。
本市でも、不登校対策として教育支援センターや心の教室の取組が進められているが、まだ課題は山積していると感じる。高尾山学園の校長によると通常校でできる不登校の未然防止策は①“ねばならない”からの脱却②徹底した情報共有③少しだけ余裕をつくる④関われる人を多くする、が挙げられていた。このようなことに取り組むことが必要だと考える。